

〈実践報告〉

キャンパスアジア・モデルに基づく 人材養成メカニズムの探索と実践について

陳 多 友

1. キャンパスアジア・プログラムの背景

IMFによる2017年10月時点の推計によると、中・日・韓3カ国の2018年の名目GDPの世界全体に占める比率は23.4%に達す。それに対して、世界第一と第二の経済体であるアメリカとEUはそれぞれ23.9%と21.9%となる。そして、中日韓三国の経済発展の伸び率は凄まじいものであり、遠くない将来に世界をリードできるようになるだろうとされている。したがって、経済、政治、文化及び科学技術などの面において、全面的にアジアの時代を切り開くべく、中日韓三国を中心としたアジア各国間における緊密な協力が必要不可欠なものになるに違いないだろう。と同時に、アジア各国間のネットワーク作りを計るために、アジアを熟知した上で、アジアの共同発展を意識しうる若手人材を培うことが決め手になるであろう。

アジア地域における大学生同士間の相互理解と国際的総合能力を強めるために、教育レベルにおける協力体制を作っておかねばならない。手短かに言ってしまうと、一方では、交流を行うことにより、大学生同士間の友好的な絆が強まり、あらゆる領域に関する知識の習得を促進でき、更に人的ネットワーク作りを改善でき、最終的にアジア各大学間の協力的土台作りに繋がっていくものだといえよう。また、もう一方では、アジア地域における大学生同士間の交流を促進させるために、留学生交換のプログラムを立ち上げねばならないだろう。

それで、中日韓3カ国政府では、ヨーロッパで1987年度より実施し始めたERASMUSプログラムを手本とし、キャンパスアジア・プログラムを立ち上げることに合意に達したわけである。

アジアの中核である中日韓三国は主導的に手本作りを行うべきである。地理的に見れば、三国は一衣帯水の隣国同士であり、相互間の留学生派遣数が最も多い。故にキャンパスア

ジア・プログラムが先んじて稼動すれば、アジアにおいてモデル作成の働きを果たすことになるだろう。また、プラットフォームを作り上げて、三国間における留学生交換プログラムを行うことにより、本地域における各大学間で共有できるカリキュラム体系作りが完成でき、ジョイント・ディグリー或いは多国での複数学位が獲得可能な教育の体系的な発展を実現できるであろう。

2, プログラム推進のプロセス

2.1 中日韓首脳会談

第二次中日韓首脳会談は2009年10月10日に、北京にて開催された。同会で3カ国は大学間の交流を引き続き行い、人的資源の強化と教育領域における緊密な協力などに関して、合意に達した。(3カ国協力10周年共同声明)

日本側の鳩山由紀夫首相は青少年同士の交流を図るために、大学間の単位互換を通じ、大学間の交流並びに協力を実現していきたいと意思表示した。

第三次中日韓首脳会談は2010年5月30日に韓国の済州で行われた。三国首脳は単位互換とジョイント・ディグリーを相互に認め合うプログラムにより、大学間における交流を拡大していくことに合意に達した。(3カ国協力 VISION 2020)

新たに稼動し始める新規プログラムの一環として、CAMPUS Asiaパイロット・プログラムの施行を決めた。

2.2 中日韓大学教育交流専門家委員会 (2010年4月16日・東京)

第一回中日韓大学教育交流専門家委員会が2010年4月16日に東京で開催され、前掲のプログラム名をCAMPUS Asiaと名づけ、その施行を司る組織として、実務者委員会を組織した。同委員会のメンバーは3カ国の閣僚レベルの公務員・品質管理保障機構の代表・大学の総長(学長)及び産業界の関係者の代表より構成される。

第二回中日韓大学教育交流専門家委員会は2010年12月10日に北京で行われ、「折り紙付きの(品質的保証のある)中日韓大学間交流と協力」を共同で行おうと決めた。そして、交流プログラムの品質を確保できるように、実務者委員会委員である3カ国政府・品質管理保障機構の代表・大学の総長(学長)及び産業界の関係者の代表の各自の責務を明らかに規定した。

そして、2011年度CAMPUS Asiaパイロット・プログラムの推進と3カ国政府による財政的援助などに関して、合意に達した。

パイロット・プログラムの基本的な原則として、3カ国の大学は各自自分の意志で参加するか否かを決めるとされた。そしてなるべくモデル構想を実現できるように、バリエーションに富んだ交流プログラムの設計を認めることとなった。この案が公布された後、あわせて52の事業団から申請書が提出された。



写真1 中日韓3カ国リーダー「キャンパスアジア」プログラム始動セレモニー
(2012年5月・中国北京・人民大会堂にて)

3. 本事業団キャンパスアジア・プログラム実施の背景

3.1 背景

広東外大は早くも2006年の春から、海外における主要な提携校である日本立命館大学、韓国東西大学と共に、遠隔教育と短期間集中講義をメインのコンテンツとした交流及び協力のプラットフォームを構築してきた。当校東方言語文化学院日本語学科・立命館大学文学部及び大学院文学研究科・東西大学外国語学院の学部生と院生たちは3カ国の専任教師や専門家の指導の下で、遠隔教育と短期集中講義に携わることにより、3カ国の歴史・文化・経済・産業・文学・社会などに関して、斬新な問題意識を持ち、話題になっている課題を洗い出し、多角的なメソッドやアプローチを用いて、共同調査と研究を行い、熱い討論やレポートの作成などを通じて、切磋琢磨を繰り返すことに力を入れてきた。これまでこの交流プログラムに参加した学生数はすでに千名以上に達しており、ここを出た卒業生は国家公務員や教員やビジネスマンになり、3カ国の各界にて大いに活躍している。現にこのようなイノベーションによって、我々は人材養成と国際交流協力などのレベルにおいて、

多大な業績を成し遂げ、社会各界から好評を博していると言えよう。その影響の輪が広がるにしたがって、我々はアジアにおける大学間の交流協力にとって、一つのモデル作成を試みた上で、本事業団がキャンパスアジア・プログラムに加盟するに足る地慣らしの作業も完遂しえたのである。

それで、三大学間で積み重ねてきた成果を生かし、既存のプラットフォームの影響力を更に深め、東アジア地域における大学間の交流と協力を促進させるために、われわれ3大学は手を取り合い、キャンパスアジア・プログラムに参加することに合意したのである。



写真2 広東外語外貿大学正門（白雲キャンパス）



写真3 立命館大学



写真4 東西大学

3.2 本事業団の優位性

前掲のごとく、広東外大・立命館大・東西大事業団は2011年7月に本格的に結成されて後、直ちにキャンパスアジアプログラムに採用されるように稼動し始めた。幸いなことに、本事業団は延べ52の申請者から北京大学、清華大学など十の団体とともに勝ち抜き、輝かしくキャンパスアジアパイロットプログラムに入選した。特筆すべきは広東外大は中国における唯一の言語系の入選大学である。本事業団は次のような長所が備わっている。

- ①国際教育を行うための豊かな経験を持っている；
- ②教育経験の豊富な教師陣を持っている上に、専門化した教育内容を備えている；
- ③東アジアで、幅広く影響力もあり、強靱な競争力を有している；
- ④長年にわたって積み重ねてきた遠隔教育と集中講義の経験を生かした『移動キャンパス』であるため、独創的でグローバル化した教育モデルとして実行に移す価値があることが、既に実践により検証された。
- ④優秀な管理陣を持っている。

3.3 プログラムのあり方の紹介

(背景・目的・学術分野・交換留学生の数・授与学位・達成・期待される結果等を提示)

本事業は、2011年から開始したキャンパスアジア・パイロットプログラムを基礎とする。中日韓の全ての言語・文化・歴史・社会を深く理解し、その高いコミュニケーション能力を発揮しつつお互いの立場や考え方を尊重する中で、文化的な国際交流や教育研究の分野など国際協働の場で今後活躍できる「東アジア人文学リーダー」を養成することを目的としている。3カ国ともに毎年20名の学生を選抜し、2・3年生の移動キャンパス時には、各学生が2カ国を学期毎に移動しながら学ぶ。本プログラムの所定の成績、所定の条件を満たした学生に、三大学の学長名を明記した三大学合同の修了証を発行し、所属大学から専攻分野の学位(学士)が授与される。これにより2019年度には240名のCAP生が存在することになる。本事業を通じて、アジア各国で適用できる、持続可能な多国間連携型高等教育モデル(キャンパスアジア Guangwai/Dongseo/Ritsumei モデル=GDR モデル)を構築し、キャンパスアジアの拠点の高度化を図る。

3.4 プログラムの目的と背景

本事業は、三大学が共同運営する高等教育プログラムを通じて東アジア人文学リーダーを育成し、その拠点としての役割をさらに高度化することを目的としている。京都と釜山、広州という歴史ある三都市において、日中韓の伝統文化と現代文化に通じた、高いコミュ

ニケーション能力を有する人材の育成を目指し、日中韓次世代リーダーのネットワークを構築する。ここで、目標している人材像とは、具体的には以下の通りである。

- ①日中韓の全ての言語と東アジアの文化・歴史・社会を深く理解している人材。
- ②高いコミュニケーション能力を発揮しつつ、お互いの立場や考え方を尊重できる人材。
- ③文化的な国際交流や教育研究の分野など国際協働の場で活躍できる優秀な人材。

2003年以降、広東外大・立命館大・東西大の3大学の学生が中日韓の文化・社会等についての発表・討論を行うテレビ会議による講義を実施してきた。それを発展させたものが、2011年から取り組んだキャンパスアジア・パイロット・プログラムである。パイロット・プログラムでは、各大学10名計30名の学生が3大学を2周する移動キャンパスを行い、東アジアの次世代人文学リーダーとなる人材を育成することができた。この成果を受け、3大学は2014年6月に本プログラムの常設化協定を締結し、2015年9月より広東外大を皮切りに常設化プログラムを開始している。

本事業は、パイロット・プログラムを基礎としながら教育内容や運営体制の改善を図り、以下に示す3つのテーマを新たな方針として運営していく。

3.5 交換留学プログラムの内容

3大学がそれぞれ毎年20名の学生を本プログラム学生として選抜する。2回生・3回生の移動キャンパス時に、各学生が2カ国を学期毎に移動しながら学ぶ。

規模の拡大：①各大学の1学年あたりの交流学生数の増加（20→40 students）、②留学中の履修期間の長期化（20→33weeks/year）

多面的な学習：①東アジアの3カ国語学習の体系化、②人文学科目の重点化と多様化、③国際インターンシップなどキャリア形成の強化

質の保証と改善：①三大学教職員合同会議の充実、②専門家によるプログラムの成果の分析と世界に向けた情報発信、③カリキュラム設計や成績管理等の協働性の強化。

カリキュラム：学部2・3回生時に実施する「移動キャンパス」を含む4年一貫のカリキュラムを3大学が共同運営する。人文学と複言語主義に基づく「東アジア人文学リーダーの育成」を3大学共通の人材育成目標として設定する。カリキュラム内容・成績管理（共通GPA）・単位認定基準の共通性・統一性を確認し、各大学のスクールカラーや優れた特徴などのオリジナリティも重視する。

カリキュラム構成の要点は以下の通りである。

- ①語学教育の体系化：1回生から相手国の2ヶ国言語を体系的に学習。2・3回生は現地で学ぶ。

②集団授業「キャンパスアジア演習」：4年間を通じて、異文化理解や多文化間調整などのコミュニケーション能力、リーダーシップを養う小グループ授業。

③東アジア人文学科目群などの専門科目

移動キャンパス時に自国学生と留学生とが一つのクラスで学ぶ異文化理解を前提とした授業。東アジアの人文学への深い理解のために特化された専門科目群。

授与学位：本プログラムの所定の成績、所定の条件を満たした学生に、三大学の学長名を明記した三大学合同の修了証を発行し、所属大学から専攻分野の学位（学士）が授与される。

同一分野での既存国内外プログラム／教科課程との相違点

学部生を対象にした4年半（立命館大、東西大は4年）一貫のプログラムである。人文学分野で、各国の現地語の習得を重視しトリリンガルを目指す類例のない高度なプログラムである。3カ国学生の深い交流を促進し、東アジアの次世代の連携を築くためのプログラムである。

3.6 期待される効果

全世界に向けた3カ国間の国際高等教育の、実践経験を踏まえたモデルの提起。高等教育の新時代の人材育成目標としての「多文化国際交流人材（東アジアの現地密着型コミュニケーションリーダー）の育成」の提起。東アジアの豊かで複雑な文化・歴史を前提とした、次世代を切り拓く人材の連携を提唱する基盤形成。東アジアのローカル言語トリリンガル育成の具体的プロセスの普及。

3.7 協力体制や参加大学の役割

- ① 3大学は、2016年度以降、移動型国際共同キャンパスを運営する。
- ② 3大学は、合意されたプログラムの申請内容を充実させ、教育の質を保証する。
- ③ 3大学は、合意による単位を認定し、所定の条件を満たした学生に共同修了書を発行する。
- ④ 3大学は、交流期間中に相互学費免除する。
- ⑤ 3大学は、プログラムの円滑な運営のため、担当の教職員をチームとして組織する。

3.8 単位交換・単位評価・学位授与フレームワーク

単位交換：2, 3年次の移動キャンパスで、派遣先で履修した科目（言語、教養、専門等）については、各大学の学則に基づいた単位認定が行われ、卒業単位に組み込まれる。

成績評価：移動キャンパスで履修した単位は各大学が成績評価を行い、所属大学の単位認定基準に基づき単位認定を行う。また、各大学は成績評価について相互に情報共有する。

学位授与フレームワーク：卒業論文・試問によりそれぞれの所属大学から学位が授与される。またプログラム修了者には、三大学合同修了証が授与される。

3.9 学生支援（学費免除、カウンセリング、現地体験、インターンシップ等）

受入れ大学は、下記のような学生支援を行う。

学費免除：3大学は交流学生に対し学費を相互免除する。

居住環境：受入れ期間、学校の寮または同等の施設の使用を保証する。

カウンセリング：相手国の言語でカウンセリングを受けられるような条件を整える。

インターンシップ：大学間協力と産学連携により、海外インターンシッププログラムを提供する。

3.10 語学計画

参加学生は本国と相手国での言語授業を履修しながら、プログラム修了時まで、相手国2カ国語の上級レベルの言語資格を取得することを目的とする。本事業では、学生の言語習得を促すための十分な支援を各大学が行う。

表4 言語能力到達目標

学年	到達目標	語学検定試験		
		日本語 (JLPT)	中国語 (HSK)	韓国語 (TOPIK)
1年次	初級)基本文法を理解し、簡単なコミュニケーションができる。	N4以上	2級・3級以上	2級・3級以上
2年次	中級)日常会話など限られた場面でのコミュニケーションができる。母語による補助授業等のサポートを受けながら、外国語による講義(概論科目)を理解することができる。	N3以上	4級以上	4級以上
3年次 4年次	上級)チューター等の助けを借りながら、外国語による講義(専門科目)を理解することができ、学習内容についての簡単な発表ができる。 最上級)様々なテーマに関する資料の読解、レポート作成、および討論ができる。	N1・N2以上	5級以上	5級以上

3.11 モニタリング及び評価，フィードバック計画

本事業の評価に関しては，3大学教職員合同会議にて毎年実施した上で，各大学においても同会議の評価について検証を行う。また，学外有識者による授業見学・学生懇談の機会を設け，プログラムの検証を行い，次年度の運営に反映させる。それらの評価や事業内容を年次評価報告書にまとめ，広く公表する。

3.12 広報・普及計画

各大学のホームページ，ニュースレター，ウェブマガジンに加え，本事業に関する多言語ホームページを引き続き運用し，外部への情報発信を積極的に行う。また本事業を対象とする研究者による共同研究を推進し，プログラムの成果に関する情報を世界に向けて積極的に発信していく。

3.13 その他機関（自治体，その他 NGO，企業等）との協力及び該当機関からの支援）

パイロットプログラムを通じて，外国人学生を対象とした海外インターンシップを各国で開発した。これをもとに，産学連携ネットワークをさらに拡大し，移動キャンパス参加中の3年次には企業見学や就職セミナー等を実施する。

4, 本事業団キャンパスアジア・プログラムの展開の実況

表1 キャンパスアジア・パイロット・プログラム採択リスト

番号	中国側大学	日本側大学	韓国側大学	プログラム名称
01	広東外語外貿 大学	立命館大学	東西大学校	東アジア次世代人文学リーダー養成のための、 中日韓共同運営トライアングルキャンパス
02	北京大学	一橋大学	ソウル大学校	アジア・ビジネスリーダー・プログラム
03	清華大学	東京大学	ソウル大学校	公共政策・国際関係分野における BESETO ダ ブル・ディグリー・マスタープログラム
04	清華大学	政策研究大学 院大学	韓国開発研究院	北東アジア地域における政策研究コンソーシア ム
05	清華大学	東京工業大学	KAIST	中日韓先進科学技術大学教育環
06	吉林大学	岡山大学	成均館大学校	東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打 ちされた中核的人材育成プログラム
07	中国人民大学 清華大学 上海交通大学	名古屋大学	成均館大学校ソ ウル大学校	東アジア「ユス・コムーネ」(共通法)形成に向け た法的・政治的認識共同体の人材育成
08	南京大学 上海交通大学	名古屋大学 東北大学	ソウル大学校 浦項工科大学校	持続的社会に貢献する化学・材料分野のアジ ア先端共同教育拠点の形成
09	上海交通大学	九州大学	釜山大学校	エネルギー環境理工学グローバル人材育成の ための大学院協同教育プログラム
10	復旦大学	神戸大学	高麗大学校	東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養 成プログラム

以上に述べてきたように、2012年5月に、キャンパスアジア・プログラムの本格的な批准に先立って、我々の事業団ですでに運営され始めた「東アジア次世代人文学リーダー養成のための、中日韓共同運営トライアングルキャンパス」(中国語名称：中日韓三国聯合培养东亚地区跨世代人文精英之流动校园工程)は採用されることになった。

図1 言語的知識と文化的素養の枠組み図

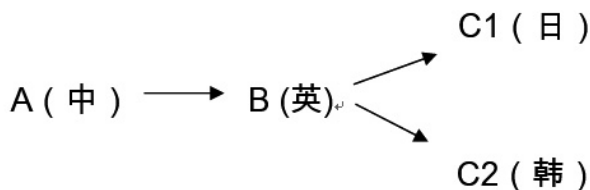
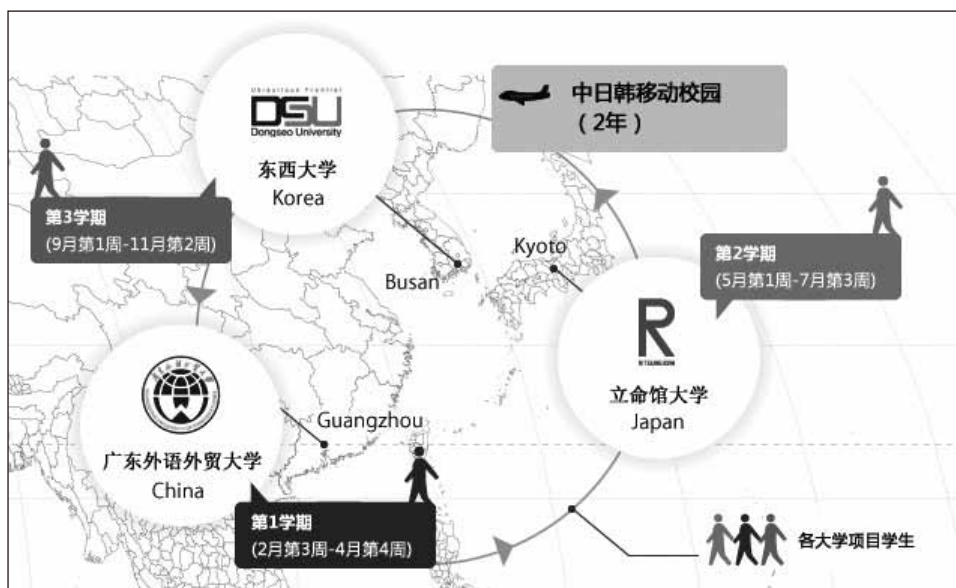


図2 「移動キャンパス」イメージ図



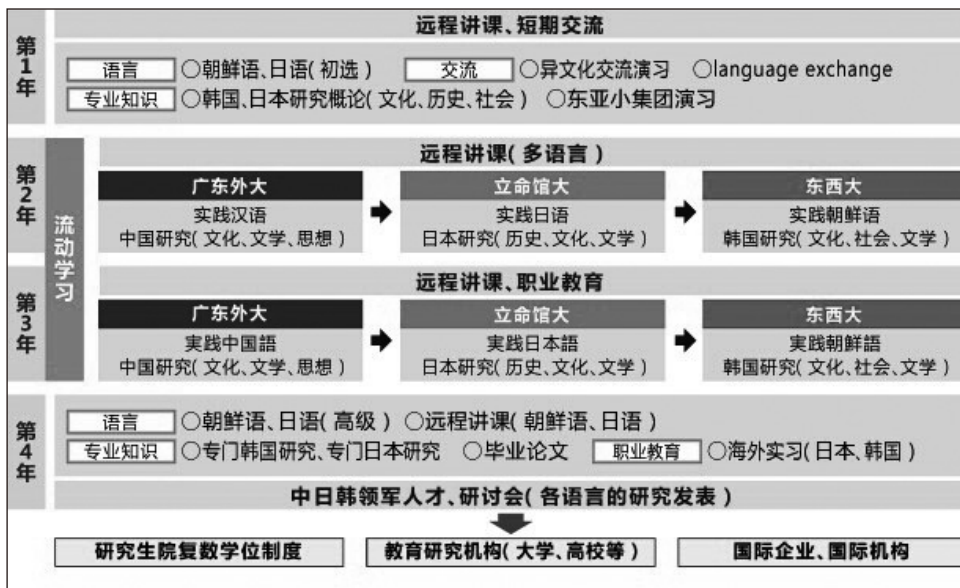
これを機に、本事業団はキャンパスアジア・モデルに基づく総合的な人文学リーダーを培うための人材養成メカニズムのイノベーションと探索を本格的に稼動した。広東外大——立命館大——東西大の三大学の優位性のある学科体系をサポートとして、中国語・英語・日本語・韓国語を同時に習得し、しかも東アジア文化・社会などに関して、豊富な知識と濃厚な素養のある人材を養成するところに、狙いがあるわけである。と同時にグローバル化した視野から強い問題意識を持ち、あらゆる文献・テキストそして現実に働きかけ、柔軟な方法を用いて、問題を分析したり、解決案を出したりする能力も身につけさせておきたい。

4.1 学生の基本的な能力の養成について

- ①東アジアにおける伝統的な文化に関する一般的な知識を身につけ、変容しつつある東

- アジア社会に対し、高度な理解・解釈能力を有すること；(認知力)
- ②高度なテキスト分析・研究能力があり、しかも優れた判断力と思弁の独創力を持つこと；(言語と論理的力)
- ③トライアングルキャンパス教育、遠隔教育、集中講義そして社会勉強などを通じて、多国言語知識、社会文化的知識を習得させ、濃厚な人文的素養を身に備えつけ、東アジアという高い識見力を持たせ、さらに国際レベルのルールにも詳しく、直接的に国際的競争に参加したり、グローバル化したイベントを行ったりする能力を培うこと；(多角的な異文化コミュニケーション能力)
- ④国内外においてホット・プロブレムとなった問題あるいは緊急に扱わざるを得ないすべての課題や難問に柔軟に対応でき、そして要領よく解決案を講じたりする能力を身につけさせること。(実践力、行動力)。

図3 トライアングル・キャンパス・プログラムのカリキュラム表



4.2 主に解決できる教育上の問題

まず最初に国際的人材養成において二国間交流に限るという伝統的な常識を打破し、中日韓三国間交流というトライアングル・キャンパスモデルを独創的に立ち上げることであり、旧来どおりの多国言語同時習得時で避けられない『相殺現象』を打ち破ることが出来るようになった。

第二に、外国語専門人材を養成する場合、単純に言語の教育が最優先され、とかく文化的体験と異文化コミュニケーションが無視されがちである。このようなボトルネックを打ち破ることができるのがトライアングルキャンパスプログラムである。

第三に、学習者の人文学的素養を深め、国際意識を高めることが出来る。

第四に、多言語・文化的知識を用いて、総合的に問題を分析し解決する能力を大幅に改善することに繋がっていく。

4.3 教育上の問題の解決方法

第一に、特色のある複合型人材養成するためのプランを組み立て、中日韓3カ国大学間で共有できる一本化したカリキュラム体系を作ることである。

全体として、“1.5 + 2 + 1”という三段跳び式のトライアングルキャンパス合同養成モデル作成を完遂している。

第一段階（1学期目から3学期目まで）は、学生は派遣側である広東外大キャンパスにて、所定の履修科目を修得すると同時に、キャンパスアジア・プログラム専用の日本語と韓国語の授業を受ける。そして、夏休みや冬休みなどを利用して、対象国へ文化体験やショートステイのために派遣したりする。

第二段階（第四学期から第七学期まで）は、移動キャンパス（トライアングルキャンパス）であり、本プログラムにおける人材養成の核心的内容である。三大学で毎年それぞれ20名の定員を募集する。各々それを十人ずつのグループに二分し、同時に二つの相手国にそれぞれ派遣し、他国のグループと合流し、三つの20人ずつのクラスを組織する形で、トライアングル（移動）キャンパスにおける教育を実施する。

移動期間内において、専門的言語類のカリキュラムのみならず、豊富多彩な人文学、社会学的課程も十分に履修するようになっている。

図4 トライアングル・キャンパス・プログラムのアウトライン



3カ国の学生たちは共に勉強し、共同生活を過ごし、共に文化的体験を行い、そして、一緒にいろいろな課題について切磋琢磨を重ねていく。

第三段階（第八学期から第九学期まで）は、リーダーズフォーラムを行ったり、国際インターンシップを実施したりすることにより、学生たちの应用能力、異文化コミュニケーション能力、そして総合的競争力を磨き、強めさせていく。同時に就職に必要なプラットフォームやチャンスを提供する。実習終了後、三大学所定の品質管理のスタンダードや規範にもとづいて、卒業論文を作成する。もし所定の単位を修了でき、また対象国の語学力認定の能力試験に合格した証書を獲得した上で、卒論を全力で書き、そして審査答弁に通ると、三大学から卒業証明書や学位証明書を授与される。さらに、三大学リーダー合同署名の修了証明書ひいてはジョイント・ディグリーも授与される。

第二に、遠隔教育のシステムを利用して、国際的にも優れた教育資源を共有することを実現した。そして、夏休みや冬休みに実施する対象国文化体験や集中講義などにより、学生たちの自国と対象国文化に対する感性を磨き、それらに関する理解力及び解釈力を強めていく。

遠隔教育と集中講義は本プログラムの特徴的な部分であり、移動キャンパスを補完するものである。我々は常に移動中の学生と未派遣の学生を対象に、遠隔教育のカリキュラムを開くようにしている。3カ国の学生たちはこれによって、共同で重要な課目を履修できる。そして、専任教員の指導の下で、距離と国境を超えて、ネットワークを作り、いろいろな共同研究を行い、成果を共有できる。それと同時に、夏休みや冬休みなどを利用し、一週間にわたる集中講義や文化体験などを受けることが可能である。

前述してきた深層融合式の教育手段を通じて、国際的な優質教育資源を共有することができ、学生たちの認知力・理解力及び解釈力を深化させると同時に、実践力・応用力また異文化コミュニケーション能力をも大幅に向上させることができるのである。

第三に、国内外における実践的教育とインターシップのためのプラットフォームを作り上げ、学生が理論を実践に応用する能力を高めた。

二年生の時から移動キャンパスが始まる。派遣期間において、対象国の大学はいずれも文化体験志向のカリキュラムやイベントを教育体系に有機的に組み入れてあるため、学生の理論と実践を一本化させる総合能力を向上させることができる。

対象国の大学と共同で現場教育やインターシップの基地を開発し、共同で運営し、共有できるようにしている。海外実習の業種と場所は、学生各々のキャリア志向や特徴に基づいて、自由に選択できるようにしている。

これまでの伝統的な教育モデルに比べて、上述してきた措置によって養成された学生は、より高い実践能力や異文化コミュニケーション能力や総合的競争力が備わっている。

4.4 本事業の独創性と強み

第一に、人材養成の理念とモデル作成が共に独創的である。

独創的な理念に基づき、明確な人材養成のターゲットを打ち立て、完備されたカリキュラム体系、専門的な教師陣並びに管理陣を有している上、共同でトライアングルキャンパスを運営することにより、複合型人材を育成する。このような人材養成のメカニズムは中国ではもちろんのこと、中日韓三国においても、独創的なものであろう。

3カ国の学生たちは、各々自国にて学習する語学的実力を土台作りとして蓄えておき、その後移動キャンパス及びその他の教育活動の中で、中日韓英などの言葉を使ってコミュニケーションを行う。それと同時に、共同で生活を営み、共同で社会体験を実施し、共同で対象国の生の文化を経験することにより、文化的違和感を解消し、カルチャーショックを緩和し、相互理解を深め、一体化した認識の土台を築いていきたい。

第二に、教育の手段が独創的なものである。

『隙のない連携』により、三大学間でお互いにカリキュラムを共有でき、そして単位互換もできるため、移動キャンパス中における人材養成の質と量を保つことが出来る。遠隔教育を通じて、優秀な国際的教育資源を即座に共有できる。そして、中日韓3カ国学生が深い共同勉強・共同生活・共同探索により、伝統的教育の場合において避けがたい『多言語同時習得時における相互相克』という難題を効率よく解決することが実現できた。そしてこれによって、学生の複数言語同時習得能力と応用能力、多国間異文化コミュニケーション能力を高めることが出来た。それと同時に学生の自己把握能力・比較能力を形成させ、その思考力と独創力を高めることも出来た。

第三に、運営と管理の方法が独創的である。

3カ国大学は教務管理、教育資源の配置、教育技術の開発と運用及びインフォメーション・プラットフォームの整備などの分野において、共有を志向するメカニズムを作った。三大学の事務員同士がハイテクの通信手段を利用して、お互いに迅速な連絡が取れるようにすることにより、すべての仕事が順調に運ばれているのである。

突然何か起こったり、或いは手を焼く複雑な問題が起きたりした場合、テレビ会議を開催して、相談することにより、解決案を共に考える。その上、毎年慣例として、『3カ国教職員合同会議』を行い、前年度の仕事の成果を纏めた上で、次年度の学科建設と人材養成に関する重大な問題を巡り、検討しあい、より完璧なプランを作る。

第四に、特色のある品質保障と評価体系を有している。

我々は内部と外部品質モニタリング及び評価メカニズムを策定することにより、人材養成の品質に対し、ダイナミックなモニタリング・把握・評価を行い、そして機を失わずに妥当な修正案やアドバイスなどを案出する。

まず、三大学間で運営に関する統計やデータを共有する上で、共同で、審査の結果を分析する。問題や気づいたことがあれば、共同で解決するように努める。それと同時に、不定期的に業界の専門家を招いて、『合同診察』を行うことにより、多方面から具体的な意見や提案を求める。また、指導部のリーダーや国内外から見学者が視察に訪れる度に、我々は必ず本事業の運営状況など報告したり、プログラム報告書を見せたりすることにより、心をこめて、来訪者と意見交換を行い、彼らの建設的なアドバイスを求めている。そして、仕事中に生じた資料や書類などを迅速に片付け、系統的にファイルボックスに保管しておき、事後の審査や点検に提供するのである。

4.5 本事業で獲得した成果の波及効果

第一に、本事業は東アジア及び太平洋地域における平和と発展の大きな機運にぴったり

寄り添い、経済社会の発展にとって、期待されるべき複合型の人材を養成するところに狙いがある。そして、多国語が同時に使用可能な人材養成メカニズムのイノベーションに関して、有意義な模索を行い、そして素晴らしい効果が上がった。

我々はパイロット・プログラム実施以来積み重ねてきた成果の普及と応用を極めて重要視している。広東外大グループでは、このようなメカニズムを大学院生教育レベルに繋ぎ合わせる場所である。また、それと同時に、キャンパスアジア・モデルを生かして、A（中国語）+B（英語）+C1（マレーシア語）+C2（インドネシア語）やA（中国語）+B（英語）+C1（タイ語）+C2（ラオス語）や、A（中国語）+B（英語）+C1（ウルドゥー語）+C2（ヒンディー語）やA（中国語）+B（英語）+C1（ペルシャ語）+C2（トルコ語）といった多国語同時使用可能な人材養成メカニズムを拡散しようとしているところである。また一方、校外では、中国における小学校や中学校や高等学校にも波及効果を及ぼしていきたいと考えている。今まで試行錯誤として、このようなメカニズムを中山大学藍山外国語学校とか広東外大付属外国語学校とかの基礎的教育機構に導入しているのである。

第二に、本事業は3カ国教育管理部門（中国国家教育部・韓国教育部・日本国科学文部省）及び相関する政府部門から高い評価と認可を獲得している。すでにモデル作成の模範として、中国国内外に向けて、紹介・推奨されてきた。

まず、本事業は中国教育部による中間検定・終期検定において、最高評価を得られた。合計十のパイロット・プログラム事業団の模範とされたため、頻繁に他の事業団や社会各界に対して、我々の業績を紹介するチャンスを獲得してきた。例えば、2015年に、中国教育部高等教育教学評価センターによって、『「キャンパスアジア」パイロット・プログラムの優秀な実践例抜粋』が編集され、その中において、本事業の成果がモデル作成の手本として、大いに推奨された。

また、2016年4月21-22日に、中国外交部と教育部が共同で北京にて3カ国主要メディア向けの記者会見を行った。主にキャンパスアジア・パイロット・プログラム実施の成果を紹介・宣伝することが目的であった。陳多友教授が会議にて、本事業団を代表し、本事業における人材養成メカニズム・イノベーションの探索や実践で獲得した実績を述べ立て、会議参加者一同から高い評価を受けた。その後、中日韓3カ国の合意に基づき、「キャンパスアジア」プログラムは規模を増やすことになり、メンバー数は十から十七に増えたのである。

同年10月、韓国ソウルにて開催されたキャンパスアジア常設化キックオフセレモニーにて、本事業の実績は改めて特別優秀成果として、推奨された。

また、中国教育部のリーダーにより本事業は「土台作りが最も堅実なものであり、指導

部の人間に最も重要視され、組織が最も健全なものであり、運営が最も効果的であり、教育モデルが最も独創的であり、実施の効果が最も目立ち、持続可能で、普及していけるものだ」(王戦軍：2015)と高く評価された。

他に、中国国家留学基金委員会副事務総長曹士海氏(2014)、中国教育国際交流協会事務総長生建学氏(2015年)、中日韓協力処副事務総長李鐘憲氏(2015年)及び梅沢彰馬氏(2016)、中国教育部協力司司長陳盈輝氏(2016)等々の政府部門或いは国際機構のリーダーも本事業団の広東外大キャンパスを訪問し、いろいろなイベントに参加した。

第三に、本事業は社会各界から大いに関心を寄せられ、認可されている。

本プログラムは中日韓3カ国のメディアに大いに注目されている。日本朝日新聞、中国南方日報・青年報・中華ネット・新浪ネット、韓国KBSニュース等々が長期間にわたって、大いに報道し、宣伝した。それと同時に、本事業は既に広東外大教育国際化における目玉プロジェクトになっているため、常にたくさんの訪問客を迎えている。我々の運営様式といい、管理のメカニズムといい、或いはカリキュラム体系の設置といい、人材養成のプランといい、いずれも尋ねてくる見学者に高く評価されている。そして、我々の積み重ねてきた経験をモデルとして利用し、本事業同様の人材養成のプログラムを立ち上げていきたいと願っている大学も存在している。

4.6 初期に収めた成果

パイロット・プログラムは2016年1月半ばをもって成功裏に閉幕し、広東外大で輝かしい修了式が行われた。中日韓協力処副事務総長龍沢彰馬氏や中国教育部対外協力司副司長陳盈輝氏をはじめ、3カ国政府の高官や国際機構の長官など大勢がセレモニーに臨席し、賞賛の言葉を述べた。合計30名の中日韓三国の卒業生に対し、おのおの自国大学の卒業証明書と学士学位証明書を授与したのみならず、三大学総長合同署名済みの修了証明書も授与した。

パイロット・プログラムの卒業生の就職先

三大学合計30名の卒業生は全て自分の進路を決めた。主に多国籍企業と国際交流機構に勤める卒業生がほとんどである。中でも、アニメーション産業・IT産業・ハイテク分野・メディア・国際交流機構がメインになっている。それと同時に一部ではあるが、外国に渡航し、大学院に上がった学生も若干いる。

結語：キャンパスアジアの働きについて

4年半にわたる三大学間の協働により、試行錯誤であったパイロット・プログラムは成功裏に一段落を終えた。本事業団は、学科建設・人材養成・国際交流・文化の独創などなどの面において、誇るに足るすばらしい業績を勝ち取り、最優秀の成績をもって、三ヶ国の教育管理部门による検定・評価にスムーズに通じ、そして中日韓三国大学交流・協力のために、手本たりうるモデル作成を成し遂げてきたため、人材採用機構をはじめ、社会一般に高く評価されている。そして、2015年9月から常設化を稼働し始め、本格的に本事業を展開することになった。これで、我々は辛うじてグローバル化・複合型人材養成の道を切り開くことが出来た。

前にも触れてきたように、3カ国の政府部門や関連する国際機構のリーダーたちは、あらゆる場合において、キャンパスアジアの発展をより一層促進し、その規模と奥行きを拡大し、その人材養成の系統性・持続可能性・そして完成度を強化させていくべきだと力説してきた。それに、その経験を生かして基礎教育段階にも波及効果をもたらせるように、声高にアピールしてきた。

したがって、これからの発展の方向として、常設化を念頭に置きながら、本事業団の長所をいっそう発揮し、あらゆる資源を掘り下げて利用し、スケールと奥行きとの二つのレベルにおいて、さらに人材養成メカニズムの模索と実践を目指して、努力を重ねていくべきであろう。

(本研究は2016年度広東省総合類教育改革項目《“一带一路”背景下战略性小语种专业建设的规划与路径》基金の補助を受けて実施された)